

司会：公開講演会開催に先立ち、神前に拝礼致します。皆様ご起立いただき、代表に合わせて二礼・二拍手・一礼の作法にてご拝礼下さい。

代表拝礼、教派神道連合会理事 神道修成派 管長 新田邦夫殿。

(拝礼後)ただ今より、教派神道連合会主催、宗教者災害支援連絡会共催によります、公開講演会 いのちの重さを考える3“祈り”よりそう心を開催致します。理事長、神習教教主 芳村正徳より一言ごあいさつを申し上げます。

芳村：ただ今、ご紹介いただきました教派神道連合会の理事長、神習教の教主芳村正徳でございます。主催者を代表いたしまして一言ごあいさつをさせていただきます。

まず、今日は皆さんにお声掛けをしましたところ、こうして多数のご参加を賜りましたこと誠にありがとうございます。宗教界の皆さまにおかれましては恐らく日曜日といえれば非常にお忙しい日でございます。また、それ以外の方におかれましては、お休みのお時間でございます。そういった中、こうして足を運んでいただきましたこと、本当にうれしく思っております。改めまして御礼申し上げます。どうもありがとうございます。

また、今、隣の神道大教さまの霊殿におきまして、今年ありました2つの大きな災害で命を落とされました御霊様に対しての慰霊祭を執行していただいたわけでございますが、まずこの霊殿をお借りいたしまして執行していただきましたこと、そして木村管長先生はじめ職員の皆さま方でご奉仕いただきまして立派にお祈りを捧げることができましたこと、こちらに対しましても改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

さて、今日のこの公開講演会でございますが、「いのちの重さを考える、祈りによりそう心」ということでございます。「いのちの重さ」、この言葉を読みまして、まず私が感じたことは、日本人は神祭りということを通して、いろいろな命に対して祈りを捧げてまいりました。一神教とは異なりまして、日本では大きな命、そして小さな命まで分け隔てなく同じように大切に祭り、そして大切に祈りを捧げてまいりました。これは命だけでなく、自然に対する接し方でも全く同じでございます。大きな力と言いますか、神徳を発揚くださいます太陽、そして道端にあります草木まで、これら分け隔てなく同じような気持で大切に大切に接してきたのが日本人でございます。

しかしながら近代化が進み、昨今、この本来の日本人が持つ自然に対する気持ちといたしますか接し方、これをなにかどこかに置き忘れてしまった、そんなような気がいたします。そういった中で3月11日に想像も及ばないような大きな地震が起こり、そして津波が起きました。また9月には同じように想像を超えた台風がこの日本を襲い、数多くの人々の命が失われました。

そういった中でいま一度、この「いのちの重さ」、言葉にすると非常に簡単でございます。しかしながらいま一度、やはりこういったことをみんなで考え直さなければいけない、そういった時期に来ているのではないか、そんな気がいたします。

本日は共催ではございますが宗教者災害支援連絡会の御代表でいらっっしゃいます島蘭先

生、そして毎日新聞の編集委員でいらっしゃいます江森先生、このお二人においでいただきまして、災害の中での、宗教者のネットワークでありますとかそういったお話を伺い、また江森先生からはこの災害以後、皇族の方々がどのような祈りを捧げてこられたか、そのようなことを中心に私どもも研鑽を深めていただけたらなというふうに思っております。

貴重なお時間を頂きまして、皆さまにおかれましてもお集まりいただいたわけでございます。ぜひ、ぜひこの講演会のお時間を意義あるお時間にしていただけたらと思います。どうかゆっくりとご研鑽を深めていただきたいと思います。それではよろしく願いいたします。

司会：次に、本日の共催団体、宗教者災害支援連絡会島菌進会長よりご挨拶を申し上げ、併せてご講演をいただきます。先生、お願いいたします。

島菌：皆さんこんにちは。このたび、教派神道連合会の主催による「東日本大震災および台風12号の被災者の慰霊および追悼の集い」に宗教者災害支援連絡会が共催をさせていただきましたこと、本当にうれしく思っております。関係者の皆さまに厚く御礼を申し上げます。ちょっと風邪をひきまして声がハスキーになっておりますが、どうぞお許しをいただきたいと思っております。

宗教者災害支援連絡会と申しますのは、3月11日の東日本大震災がございまして、宗教者の方々、また宗教研究者の人たちがなんとか居ても立ってもいられないと言いますか、なんとか被災地の方々のお手伝いができるのではないだろうか、それも東京の人、あるいは関西の方たちがそれぞれにいろんなことを考えておりました。

そしてその声が次第にここへご連絡しているうちに、これはひとつ連絡の集いを作ろうということになったわけです。私は3月11日は実はイタリアにおりまして、3月いっぱいイタリアのベネチアで講義をしている予定だったんですが、このニュースを聞いてとっても素晴らしいきれいな所です。そして残りの2週間ほどの間にイタリアを少し旅行しようかと思っていたのですが、とてもそういう気になれないということで、いくつか講義をキャンセルしまして、3月20日に帰ってまいりました。

その間にうちの家族は東京におりましたが、2歳と0歳の子どもがいましたので、石川県の方に妻の実家がございましてそちらに疎開させたりしまして、大変心配いたしました。飛行機もドイツのルフトハンザは、日本の空港に着かないで韓国の仁川空港に着いて、そこで乗務員を全部入れ替えて、日本は本当に危険な国だということで大変警戒していたということでした。このお話の時間は30分でしたね。なので、あまりこういう話をダラダラと話しているわけにはいきません。

一方では、私、日本宗教連盟の理事というのを3月までやっておりましたので、教派神道連合会、全日本仏教会、新日本宗教団体連合会、キリスト教連合会、それから神社本庁、この方たちとご相談して、日宗連、日本宗教連盟として何かできないだろうかという、そ

うということと、そして研究者、これは仏教の研究者、宗教学の研究者、社会学の研究者、いろいろ集まって何か支援活動できないかというふうに考えました。

ここにおられます大阪大学の稲場圭信さんたちはネットに強いので、要するに宗教界の支援活動のあらゆる情報をネットにまとめると、こういうのをもう既に始めておられました。震災の数日後に始められたのですが、それとも連携をし、しかし単にネットで連絡しているだけではなくて顔を合わせて情報交換しようという、そういうことになりました。

これはどうしてそういうことを始めたかと言いますと、一つには阪神大震災の時に宗教界はいろいろ救援活動をやったのですが、非常に目立たなかったのです。それから何か救援活動をやると、要するに布教活動をしていると、自分たちの勢力拡大に使っているというような嫌疑を掛けられたりするということ、そういうようなことがあってあまり目立たなかったし、本来やれることがやれなかったところもあったという、そういう反省の声がございました。そこで今回はもっと大きな役割が果たせるようにということで、阪神大震災の反省を踏まえて今度は起るようになりました。

今回は実は、われわれがそういうことを言うまでもなく、宗教界の活動が非常に目立ったのです。4月1日にこの宗教者災害支援連絡会というのを始めましたが、そのころからだんだん気が付いておりましたが、例えば、報道の中でも宗教界の活動がよく報道されるということがありました。これも稲場さんたちがやっている「宗教者災害救援ネットワーク」あるいは「災害救援マップ」というような、Facebook というところに掲載されております。

これは東北という土地柄があると思います。阪神淡路の場合は神戸、大都市が中心でしたので、地域住民の数は多いんだけども住民と宗教施設の関わりは薄いという、そういうことがありました。伝統的な文化ということにもあまり注目されなかったということがあったと思います。慰霊の行事も宗教施設で行われるのではなくて、新しい慰霊施設ができるという、そういうことに注目が集まりました。

ところが今回はそうではなかったのです。例えば、僧侶の方が、つまりたくさんの方が亡くなって遺体をそのままにしておけないから茶毘に伏すという時も、自分のお寺のお坊さん方を呼ぶこともできないというふうな難しい状況もあります。それからご遺体があってもご遺族の方が見つからないという、つまりどなたか分からないというようなこともあるわけで、そういう方も葬らなければなりません。そういうことに自発的に宗教者が協力をして活動したということです。葬儀屋さんの方も活動としたというようなことがありました。

お配りいただいたレジュメを見ていただきたいと思います。今、先にお話ししたのは、宗教者災害支援対策会ですが、今、お話ししようとしているのは、「こころの相談室」というのは仙台の話です。仙台には、宗教法人連絡協議会がありまして、大変協力がうまくできています。つまり先ほど言いました、仏教会、教派神道、全日教、それから新宗連、神社本庁等々が協力して、そういうまずは亡くなった方の遺体のお世話に当たったという

ことです。そこから始まって「こころの相談室」というものができてきたということがあります。これが自然に出てきました。そういうことが報道されるということです。

被災者への支援活動をそれぞれの団体はそれぞれにやっているということです。あるいはそれぞれの団体は自分たちの教団の方を助けているし、あるいは寄付を集めて被災地に送っているということです。それから今回目立ったのは多くの宗教施設にたくさんの方が避難したということです。学校や公民館という所にも避難されますが、お寺や神社に避難したり、あるいはお寺や神社が配布物の集まったものをそれぞれに配布する時の集積場になったという、こういうふうな形でそもそも宗教施設というのはそういう働きがあったということです。

ここも大変広いです。大都会の真ん中にこんな広い所はめったにありません。たぶんここも、もし東京に震災が起こったら救援のために大きな働きができる場所ではないかと思えます。今度の震災後、被災地のお寺の中には何百人もの人が何カ月も暮らしていたというようなところがあります。そしてここも畳ですが、体育館とかに避難したら床です。そして普段はまず炊事もしないような所ですが、宗教施設というのは地域の人にそういう安らぎの場所を提供できるという、本来そういう特徴が宗教というものにあったのではないかと思えます。駆け込み寺という言葉がありますが、そういうことが今回はすごく目立ちました。

私どもは、それをもっと全国的に展開してはどうかというふうに思いまして、これは福島原発の被災者がおりましたので、つまり福島から避難される方、あるいは東京から避難される方もおられるんです。それで沖縄に行っている方もおられます。もちろん海外に行っている方もいます。中には県で受け入れている所もあります。熱心に被曝を懸念する福島の方を受け入れる、あるいは一時的に子どもが夏休みとか冬休みとか、1カ月でもいいから放射線のあまり当たらない所で自由に外で遊べる、そういう生活をさせてあげようというふうなことであります。

宗援連では最初は宗教施設がそういうことに役立たないかということでその支援を計画しました。事実、福島から茨城、千葉というふうに、そちらの方へ避難してこられる方もおりましたので、東京の中のお寺にはある程度の方が避難して来られました。全国の宗教施設でそういうことをやれば、宗教界の方はそういう人のお世話をするのを慣れておられるし、大きな力になるのではないかと、それが私どものひとつの考えでした。

ところが実際は、なかなかやはり宗教施設に避難するというのはやりにくかったので、これはあまり広がりませんでした。第一の課題と考えました避難者の受け入れということはあまり成功しなかったと思えます。つまりこれは岩手や宮城、福島のお寺は大変な働きをしました。あるいは神社、あるいは他の宗教施設、恐らく、教派神道連合会の宗教施設でもそういう避難の方を受け入れたところが多数あったと思えます。

しかし遠方で、例えば、東京の宗教施設でも郊外に行けば非常に広い所を持っておられる教団もあるので、そういう所に仮設を建てるというふうなアイデアまであったのですが、

それはなかなかうまくいきませんでした。

それから被災地支援です。これは各団体でいろんな活動をしておられます。ここに天理教の鈴木さんがおられますが、天理教は「災害救援ひのきしん隊」という重機まで持って行って大活躍をするという、そういうようなものもあります。ただそれぞれの団体がそれぞれに活動していると、結局、目立たないし、それが本当に住民のために役立っているかどうか確認もできないということです。そういうこともありまして横の連絡をしていこうということです。そしてどういう支援活動が役に立つかをお互いに共に考えようと、こういうので情報交換会というのをやっております。

4月に第1回、5月、6月、7月、それから9月、11月とやりました。次は1月9日にやる予定になっております。その次は3月18日にやるつもりです。3月11日がちょうど、大体これを日曜日にやっております、宗教界の方は日曜日はお忙しいのでなかなか出て来にくいのですが、それでもかなりの方が集まってくださいます。私は毎回出ておりますので、そういう問題があるのかと、こういうふうな支援の仕方はあるのかというふうなことをずいぶん学んでおります。

当初は浸水で汚された場所をきれいにしたり、物を配ったり、そういう肉体労働が多いわけですが。しかしだんだんだんだん落ち着いてこられますと心のケアということになってまいります。これも行政は心のケアというと、精神科医とか臨床心理士とかいう方をお願いして行かれるわけです。そういう方たちが大変立派な仕事をなさっているということはあると思うのですが、しかし住民の中にはそういう心理学的な心のケアを受けるというニーズもあるけれども、やはりどこかもっと宗教的な奥深いところで人の命を考えると、あるいは祈ると、そういうふうなニーズというのがあるのではないかと思います。

世界の病院では大体、礼拝室がありまして、チャプレンという人がいます。施設付きの宗教者です。キリスト教の国に行けば牧師さんのような人がいて、死を前にした病人の方にお祈りを共にしたり話を聞いたりするということがあります。これをスピリチュアルケアといいます、こういうことが本当はかなり多くの方が必要としているわけです。

ですので、心のケアというのをこれまでのように、医学者や心理学者に任せておくと、それも彼らもいっぱい経験を積んでいるんですけども、宗教者にも独自の役割があるのではないかと、そういうこともお話をしました。

それから4番目の追悼の時です。これは毎月、3月11日を思い出して共に祈りの時を持つということで、2時46分前後にそれぞれの仕方で祈る、あるいは思いをこらす、そういうことをしましょうということにしています。もちろん黙とうという形でもいいですし、お寺では鐘を鳴らすというふうなことをされている所もあります。今日は私は玉串を捧げさせていただいたのですが、あるいは拍手の礼拝をさせていただきました。

こういう活動と呼び掛けております。これは私は宗教界がもっと国民生活に近づいていくそういう機会にもなるだろうと、そういうふうに思っています。日本人は実は信仰心を持っているんですけども、しかしそれを表現する場所がないということです。パブリック

に表現する場所がないと、そういうふうに思います。

私自身は父方は浄土宗は母方は神道です。母はカトリックのミッションスクールに行きまして、私は幼稚園はプロテスタントの幼稚園に行ったということです。つまり私の中にはいろんな宗教の影響が入っていきまして、しっかり身に付いたものはないのです。ですが、どの宗教に行きまして、そのやり方で拝んでいる方たちの気持ちに自分が合わせたいという、そういう気持ちは持っています。こういう日本人は多いと思います。そういう人たちが共に祈りの気持ちを持つ、あるいは追悼の気持ちを分かち合うという、こういうことがあるといいだろうと、そういう考えでこういうことをしているわけです。

これは実はこの前からもっとそういうことは必要だということです。例えば、大阪の釜ヶ崎は路上生活者がたくさんいる所です。そこには大体、支援活動している宗教団体はたくさんあります。例えば、韓国系のキリスト教団体が多いのですが、そういう団体は自分たちの教団の信徒を増やすという活動をしています。しかし路上生活者のためにお手伝いをするという、ですから勢力を増やすというよりも、そこの方々のニーズに合わせて何かできることをするという、そういう活動をしている宗教者の方がおられます。これは日本のキリスト教から仏教から神道からおられるわけです。

そういう方たちが「支縁のまちネットワーク」というのを作っておられるんです。支縁というのは支える縁です。「えん」は助けるの「援」ではなくてご縁の「縁」です。「まち」は平仮名で「支縁のまちネットワーク」です。そういうふうに地域社会のニーズにいろんな宗教団体が横に連絡を取ってお手伝いをするということです。自分たちの宗教に引き入れようということではないんです。そういう活動が震災の前からありました。そういうことを震災の時は皆さん困っていて、特に、自分は助かったんだけど、大事な人は亡くなったという、非常に深い胸の痛みを持っている方がおられます。そういう方はなかなか思いをはらしても場所がないのです。そういう時にそういうふうなタイプの支援があればいいだろうと、こういうふうなことがありました。「こころの相談室」というのは、実は仙台でそれを始めた人たちがいたということです。先ほど言いましたように宗教法人連絡協議会がそういう活動を始められました。

そこに出ておりますが、これは「カフェ・ド・モンク」と呼んでいて、モンクはお坊さんですので、お坊さんが、あるいは宗教者がケーキとコーヒーを持って被災地へ行きます。最初は避難所に行っていたのですが、今は仮設に行きます。そして「ケーキ持って来たのでちょっとお話ししましょうよ」ということでお話をします。避難している方たちはみんな孤立するわけです。そのうちに弱っていくので、つながりを付けて、その人たちのニーズを引き出してお手伝いをすると、こういう活動をしておられるわけです。

このカフェ・ド・モンクというのは、そういう宗教者のカフェという意味と、カフェで文句を言い合うと、そういう意味です。文句を言うのは良くないというので、「もん」は煩悶するの「悶」です。門へんに心という字を書きます。「く」は「苦しみ」です。つまり苦しいことを話し合うという、そういう意味なんだと、そういうふうにも言っています。

10月からラジオ放送を始めました。FMで岩手、福島、宮城でカフェ・ド・モンクのラジオ版です。リアル版というのはつまり、本当に仮設に行ってお茶を飲みます。このラジオをネットでお聞きになれます。そうすると最初にアナウンサーの人が「どうぞ、ゲストの方はお茶を飲んでください」と言って、そしてゲストの方が話します。例えば、玄侑宗久さん、作家が震災についていろいろお話になります。そして最後に「どうぞ何かご相談があったらこっちへ電話してください。いろんな宗教者が対応します。何教でも対応できます」という、そういうことをやっています。非常にたくさんの電話が寄せられているというわけではないんですが、しかしそういうふうに宗教界が協力して住民のために立ち上がっていると、何でもやりたいという気持ちでやると、これが非常に新しい力になることではないかと考えております。ですので、宗援連と仙台の「こころの相談室」、これは協力しております。

この間、宗援連では元の官房副長官、福山哲郎さんという方に来ていただきました。福山さんは仏教に親しみのある方です。要するに行政としては個別の宗教でこういうことをしたいと言っても、なかなか受け付けられないのだということです。そうすると、例えば、地域のそういうお役所は宗教団体の方が避難所へ来るというと、「いやいや、それはやめてください」ということになります。しかし「もし宗教界が協力して共に助ける、そういうプラットフォームといいますか窓口を持っていれば、それは受け入れられます。政府としてもそうです」と、そういうふうにおっしゃっていました。これは政教分離という建前のお話でもありますし、それから実際、宗教団体の中には非常に強引な布教をする、自分たちの仲間を増やすことにだけ熱意があるというような団体もあります。協力することをあまり好まない団体もあります。そういう人たちが来ると確かに困るわけです。

ですから、そういうふうな開かれた宗教界の横のつながりというものを持っていて、だからこそ行政との連絡ができるのです。実は仙台の「こころの相談室」は、最初にこれを唱えたのはお医者さんなんです。岡部健先生という方なんですが、この方は死の看取りをずっとやっていた方です。しかしそういう方のお世話をしていると、宗教なしでは本当に最後の時を安らかに迎えることはできないという考えを持っていらっしゃるって、そういう考えに共鳴するお医者さんや看護師さんがそういうことをなさっているわけです。仙台のそういう死の時期が分かって死ぬ方のかなりの割合の方は、例えば在宅の最後のお迎えになる方たち、がんの方たち、うちの母もそうでした。そういう方は岡部先生の爽秋会というグループですが、そこで死を迎えるという、そういう方が、実はご本人も昨年がんになって、ますますそういう宗教が必要だという強いお考えを持って、この活動を始めているわけです。

ですので、宗教界はさっき言った、臨床心理士とか精神科医とか、あるいは死を迎える看取りの医療施設ともっと協力していきたい。そして災害の時もいろんなボランティアの組織、それには宗教と関係のない組織もたくさんあるわけですが、そういう人ともうまく協力できるようにと、そういうことを考えてこういう活動をしています。

それは結局長い目で見ると、日本の社会の中でやはり宗教は大事なんだということです。われわれの伝統の中で人の生き死を考える、それから人が生きている意味というものを深く考えようとする、やはり伝統の中にある生き方、考え方、礼拝の仕方、そういうものなしではできないのではないかという、そういうことを思い出す、あるいはアピールする、そういうことにもなるだろうということです。

2ページ目の所に「三陸復興カレンダー」というのが出ています。これは私もネットで見つけてとてもうれしくて、なるほどと思ったのですが。岩手県とかあの辺りは民族芸能が非常に盛んなところですよ。岩手には早池峰神楽とか、山伏神楽とかそういうのがあって、普段から大きなイベントがあると呼び出してお祝いの舞をやっていただいたりするわけです。たくさんの方が亡くなった、その亡くなった方の鎮魂、そして復興を願う祈りの気持ち、そういうものを表す時に芸能を見ながらそういうことができるということが大変大きな力になります。そしてそれは伝統文化、やはりこの土地に帰ってきたいと、昔からあったものをもう一回ここでつなげていけるんだという、そういう気持ちを持つことになります。

そしてたくさん津波で道具が流されました。そうするとその道具を全国で似たような活動している方が作ってあげてそれを送ってあげるとか、そんな支援の活動もあったわけです。これは日本の私なども若いころはよく夜を徹して霜月祭りというような神祭りをし、踊りを踊って夜を徹するお祭りがあります。そういうのをよく見に行きました。そういうことに対する日本人の親しみというものが今回は非常に強く思い出されました。

そこに、西部岩手というチームが神楽を作ったわけですが、「この地に暮らす人々は信仰心に厚く自然界に宿る神々を敬い信仰としての民族芸能を大切に訴えてきました。その芸能は四季折々に先祖を供養し、災害防除や悪魔退散、無病息災を祈り、五穀豊穰と大漁を祈願してきました。このたびの震災により多くの芸能団体が尊い命とともに道具や衣装を失いましたが、御霊の供養とお盆のころからわずかに残った道具を持ち寄り活動を再開している団体が多くありました。仮設から通って太鼓をたたき始める人、泥に埋もれた山車や道具を洗い清める人、それはまさに鎮魂と祈りの姿でした。三陸沿岸の人々は今、震災を乗り越えるために歩み始めています。彼らを見る時、被災地復興に思いを寄せていただきました幸いです」。これが宗教界ではない普通のボランティア団体の人がこういう思いを持っているわけです。本当にこれは新しいことではないだろうかというふうに思って、私は感じています。

次のようなこともありました。次の3ページ目です。これは私も宮城県の南部から宮古まで、岩手県まで海岸地帯を車でドライブして様子を見てまいりました。本当に何にもなくなると、お墓の中まで洗われてしまった。とてもこのお墓を元の姿にできないというところがたくさんありました。神社は大体三陸では津波が来ない所まで上がっている場合が多いです。塩釜神社は相当高い、参拝行くのも大変です。ですが今回の津波では被災を免れました。しかし、やはり海岸にもあるんです。下に出ているのは鳥居だけ石でできてい



るので立派で流れなかったということです。しかし社殿は流れてしまいました。その社殿、少し見えにくいですが、小さな祠の周りにしめ縄を張ってあります。まだ社殿ができるまでには何カ月、あるいは1年以上かかるかもしれないけれども、しかし神様だけは大事にしたいという、そういう気持ちがよく表れているものでした。

「中外日報」の記事を見て下さい。陸前高田は1本松だけ残った所です。あそこで神社が流れてしまった、宮司が亡くなってしまったんです。諏訪神社です。そこにあった神札が、お札が鹿島神宮に流れ着きました。鹿島神宮の近くに流れ着きました。そしてその鹿島神宮からどこから来たのか分からないから、長野の諏訪大社にお届けしたということです。そして諏訪大社から分かったということです。調べたら、諏訪大社が分かって、実は陸前高田のものだと分かって戻したということです。そういうことであります。

今、そういうことで津波のあった地域の神社はなんとか復興できるかもしれません。あるいはお寺もそうでしょう。しかし福島の神社やお寺はほとんど復興が不可能な所があります。これまでこういうことは日本であったでしょうか。つまり神様、仏様の居ない場所ができてしまうと言いますか、神様、仏様がいないはずはないのかもしれませんが、それを礼拝することができないような場所、そういう所ができてしまいました。あるいはこれまで礼拝されていた神様や仏様が落ち着く場所がなくなってしまったということです。あるいは再興する場所が見当たらないという、こういうことが起ってしまっています。なんとかこれを復興しようと、こういうのもそれぞれの団体で頑張っていますが、どうも仏教界の方のお話を聞くと、とてもこのお寺を全部助けることはできないということです。そうしますと、もう転職を考えている僧侶の方もおられます。恐らく他の教信徒なり、他の団体でも似たようなことがあるんじゃないかと思えます。

それから次のページですが、今回の先ほどの宗援連の考え方と通じることなのですが、要するに宗教が人助けをするという時に、こういう考え方であなたも物事を考え直せば助かりますよというのが普通の考え方だと思います。ですから今までと考え方を変えてこういうふうに信じなさいと教えるという、それは必要な時があると思います。しかし災害支援の時は、そういう上から教えてあげるということだけでは足りないではないのでしょうか。さっき言いましたように、今そこにあるニーズに応えるということが必要なのではないのでしょうか。

そうしますと、それは宗教者でなくてもできるじゃないかと言われる方がいるのです。しかしその時はそうかもしれませんが、しかし長い時間の中で考えると、宗教者が何気なくやっていたことが、実はその背後にこういう宗教的なものがあるんだということが、助けられた方に分かってくるという、こういうタイプの教えの伝え方というのがますます必要になっていると思います。

これは宗教者でも若い方とお話をしていると、「ああ、そうだ、そうだ」というふうに、これは私の少ない経験ですが、おっしゃいます。その例が足湯隊です。これは神戸の時に始まったものですが、被災者に温かいお湯のバケツとかタライのような物で持って行って、

そこに足を漬けて拭いてあげるといことです。これは温泉の足湯じゃないのですが、やはり足が温まるだけで気持ちが休まります。もんであげたりすると、あるいはお香と一緒にたいたりするのです。そういうようなことをするわけです。

つまり被災者の方に心のケアをするといっても、例えば、若い人が行って、当然、年長の方が自分の心の悩みを話すはずはありません。しかしこういうふうにしてあげると、むしろ被災者の方から「あなた、なんでこんな所に来たの」とか、自然に話が始まります。そして心を打ち解けてくれます。実は寂しい思いをしている、つらいことにもそれとなく触れるという、そういう会話が始まってきます。

ですから、傾聴というのですが耳を傾ける、これが心のケアの一番大事なこととされています。しかし「はい、今から傾聴させてください」と言っても、みんなひるんでしまうわけです。しかし「足湯をしたらどうですか」「足湯でもやってみませんか」と言うと、スッと応じてくれるわけです。これは学生がやっていることなんです、宗教者でもやっている人たちがいます。これは高野山の足湯隊というのがそうです。

そうすると、これはむしろ何故学生がやるといいかと言うと、学生はともかく被災者より学生の方が心配です。ボランティアに行くといっても、ほとんど経験がないわけですから、われわれは学生を送って学生が何か勉強してもらえればいいと思っているわけです。でも、学生に勝手に行けと言っても、そういう心の準備がない学生が行って、どうなるだろうということがあります。ですからもちろんいろんなインストラクションをするわけですが、学生がお手伝いに行って自分自身も成長するという、そういう経験をするということ、これが足湯隊の意味です。

今の支援というのは、そういう上から助けてあげる支援ではなくて、同じ目線で下から目線というか、こちらも学ばせていただくと、そして代わりに何か提供できることはするという、そういうことを両方とも望んでいます。

こういうのが今日の題ですが「祈りよりそう心」です。「ともに祈りよりそう心」、これが今の支援の在り方だと思います。

最後に、金光教の田中元雄さんの記事が「金光新聞」に載っておりまして、とても印象的だったので読みます。石原東京都知事は、これは神罰だというふうにおっしゃっていると。かなりたくさんの方が怒りました。亡くなっている人は何か悪いことをしたから罰が当たったのかというと、とてもそうは思えないということです。それではこれは全く何の意味もないのかというと、それは宗教者としてはそうも言えない。でもうまく説明できるのかというと、いやあ説明がつかない。そのことを上手に言っています。皆さんそれぞれに感じていることをいろんな形でおっしゃっています。海が憎いという言葉が聞きました。しかし時がたってみると悲しいくらいに美しい情景がそこにある。私も被災地に行きましたら本当にそう思いました。こんなことがどうして起こるんだろうという無残な光景ですが、東北の山河は本当に美しいです。私は8月に行きましたけれども、そういうことを思います。これが両方とも自然だということです。田中さんは「地震は地球のくしゃみだとかお

ならだとか子どもたちに説明しているのを聞きました」と話しています。天地の恵みの中に住まわせてもらっているのに、自然を人間の使い勝手良いように改造してきました。ところが地球をひょこっと体を震わせたら大津波があった。こんな説明が腑に落ちるところがあるかもしれません。

これは大自然とか神でも仏でもいいのですが、何か人間に悪意を持ったのではない、あるいは正しいことを人間に強制しようとしたというわけではないのです。何か人間から見ると説明できないような、しかし大自然の中に何かそういう摂理があつてこういうことが起っているのです。しかも、くしゃみとかおならというのが、私はとても良い表現だと思います。つまり自然のリズムというものを、本当は大きな恵みの中にそういう人を傷付けるような要素もあるという、そういうようなことがうまく説明されています。これは田中先生がこういうふうに教えたいというのではなくて、こういうふうな受け取り方をしている人もいますよというふうにおっしゃっているわけです。

しかしやはり今回の地震からわれわれが教えられた大きな事は、やはり人間の小ささ、人間のおもんばかりでは届かないものがこの世にはあるということです。私も 60 年代に伊勢湾台風があり、チリ地震津波があつた時に本当に怖かったという記憶があります。その後、三八豪雪というのもありました。そのころ、北陸におりましたので、自然災害というのは大変だと思いました。その後、自然災害があつたのですが、なんか自然災害というのは人間が克服できるものだというふうな気持ちに少なくなっていたかもしれないです。阪神大震災の時も、私は楽観的なものですから、これでしばらく地震が来ないと思ったのです。誠に勝手な思いでした。

そうしてそういう中で原発を造ってきたということです。そういう中にやはり人間の自分勝手といいますか、何か誤りがあつたということは否定できないと思います。

ですので、やはりこういう支援活動をしながら、自分たちのこれまでの歩み、今の生活の仕方がこれで良かったのかということ振り返る、そういう機会として今後も、これはたぶん長く続くと思います。この宗教者災害支援連絡会というのも 3 月 11 日に 1 年たったら終わりということではなくて、たぶん 2 年でも終わらず、もっと続くかもしれないです。そういうふうなこととして考えていきたいと思っています。

ぜひ、教派神道連合会、あるいはここにおいでの皆さんには関心を持っていただいて、今後もし協力いただければありがたいと思っております。大変拙い話でしたが、これをもちまして私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。